

現代フランスにおける大学入学資格試験制度の 特質と課題

内 容 目 次

宮 協 陽 三

一 フランス教育制度の歴史的背景

二 大学入学資格試験制度の社会的背景

三 大学入学資格試験制度の特質と今後の課題

一 フランス教育制度の歴史的背景

一国の教育制度は「生命力ある事象」(LSE)であり、忘却の彼方に沈んだ、さまざまな闘争と、長期にわたる困難な試行錯誤の結晶である。教育制度は一国の国民が長い間に育んできた生活様式が具体化されたものであり、またその国民性をも反映しているのである。

フランスはヨーロッパの頭脳であり心臓であるといわれている。パリは事実上ヨーロッパの首都であり、中世以来現代フランスにおける大学入学資格試験制度の特質と課題

来フランス国王はキリスト教会の長子であると思われるが、そこからフランス固有の「中華思想」(29, 131)も生まれてきたのである。

実際フランス人はフランス文化こそ人類文化の代表であると考えている。フランスは過去数世紀間にわたってヨーロッパ文化の形成者、普及者また保護者として、たんにヨーロッパだけにとどまらず、世界の政治、経済、文化の発達のために、つねに指導的役割を果たしてきたのである。

フランスは革命の国であるといわれている。宗教戦争、大革命、ナポレオン戦争、七月革命、二月革命、レジスタンスといろいろ形はちがっても、いずれも拒否と拒否とが衝突し、人権、啓蒙思想、自由ならびに法の前での平等のために不断の闘争が繰り返された。フランスは十九世紀以降の政治の民主化路線において、つねにヨーロッパ諸国の行方を照らす灯台の役割を遂行したのである。

フランスは個人と社会、すなわち自我と第三者の組織された集団とから成立している国であり、革命とは不断に繰り返されるという自覚と組織の成立の道程そのものである。それはまた近代ということの意味でもある。そこには初めがあり、終わりがある。すなわち「人間」がある。「回想録」の著者であるドゴール元大統領は、自分の文脈、さらに自分の文体をもつ人であった。ビューフォンは「文は人なり」といったが、人間の肯定も否定も、真の持続も、疑問も、批判も、すべて最も深い意味で「文」の問題である。ドゴールは単語的な個々の事象に驚いたり、感動したり、魅了されたりするのではなくて、それを自分自身の文脈におさめ、判断し、肯定し、否定する人間的な「拒絶」と「持続」とをもった、代表的なフランス的教養人であった。

フランス人は、そのような「自由」(5, 196)を尊重する。フランスにおける自由の歴史は流血の歴史であり、時

には激情的な恐怖政治、時には頑強な英雄的抵抗運動として展開されたのである。

フランスは個人主義と集産主義との調和をはかることができなかった。フランスは暴政と外敵の侵略に対しては、一致団結して抵抗したけれども、その勝利の暁には、また元のばらばらな状態に戻り易かったのである。

フランスは地方ごとに分割されており、あまり統制になじまないために、フランスの統治はなかなか厄介であったのである。伝統的にフランス精神とは野党精神であり、権威や法令に対する頑強な抵抗精神であった。フランス人は祖国の栄光のためには、あえて死をもいとわないが、現実の政府に対しては納税をしづりがちなのである。

このようなフランス人の個人主義は、その歴史的、地理的背景にもとづいている。フランス名産のぶどうでさえ、著しい個性をもっているかのである。なぜならほんの数キロメートルしか離れていない産地のぶどうですら、それぞれの産地特有の味をもったぶどう酒を産出しているのである。同じフランス人であっても、ノルマン地方出身者とバスク地方出身者とは一見してわかる特徴をもっているのである。

このようなフランスの多様性は、多くのすぐれた天才を産む土壌となったのである。それは学問や芸術や技術の未開拓な領域における独創的な発明・発見者や思想家を産み出した。有能な熟練した技術者は巧緻にして精妙な作品を製作した。

それと同時に、このような多様性はフランスの世論を分裂させ、社会的にも経済的にも興奮と対立のつぼの中に投げこみ、国家的連帯性を不断に脅やかす政治上の騒動を惹起させたのである。その結果、フランスは政治的には王国から帝国を二回、また共和国を五回も経験してきたのである。

フランスにおける暴政と専制政治に対する闘争は、いちおう勝利を得たけれども、それは不徹底のままに終わった

のである。国王と皇帝は解任され、君主政治体制は廃止されたけれども、王党派は依然として政界の中枢部において隠然たる勢力を持ちつづけたのである。教会は、かつては国家権力に匹敵するほどの勢力を有していて、第三共和国政府の世俗化政策によって国家から分離されたけれども、依然として国家を相手とした教育権論争をくすぶりつづけさせているのである。実際、フランスではローマ旧教が国家宗教として復活することを擁護する人びとが存在するのである。

フランスはまた、たえず外敵による侵略の脅威にさらされてきた。とりわけ十八世紀の産業革命の結果、東部の石炭、鉄鉱石資源地域が隣国からしばしば狙われることになった。この地域はドイツによって二度も侵略されたのである。そこからフランスの国家政策は領土と文化の保全に、全力を傾倒することになったのである。フランスの「国家連帯への要請」(15, 203)は、フランス特有の個人主義をすら克服させることになった。

それは十九世紀における王政、帝政、共和政のすべての政治体制の時代を一貫して、ナポレオン一世による中央集権的な官僚制度を維持し強化させることになった。かくしてフランスは代表制民主主義政治体制であるにもかかわらず、実際には現代文明国の中で最も中央集権的な国家体制をとっているのである。

フランスは伝統的に、「国家による教育統制」(15, 203)を国家連帯の土台に据えてきた。国家が教育に関与するのは、本質的には「政治的諸条件の統一性」(1, 126)を維持するためなのである。フランスの教育政策は教育の地方分権ではなくて、全国にわたって画一的な基準と条件の整備、とりわけ画一的な教育課程の施行によって、国民に共通の思想と感情を陶冶することにある。とくに初等、中等教育段階においては、国家の偉大な文化遺産とともに民主主義的、世俗的共和国体制の理念を教えることに努力を傾倒している。かくして国家的統一の要素は、世界

の他の国に卓絶した国家的栄光、すなわち「人類の普遍的価値の守護者」(22, 134)としての自覚によって産み出されるのである。

フランスの社会生活の風潮は、どちらかといえば保守的であり、テレビなどもあり流行らない。フランスほど伝統を固執する国はないといわれながらも、同時にあらゆる文化領域において画期的な独創的革新を成し遂げた国もない。フランス語は十七世紀ヨーロッパのすべての一流国の宮廷で話される国際語であった。フランス人は国語を愛好し、国語を話すことに誇りを持っている。新聞にも「文法欄」(24, 23)があり、この欄は、読者が好んで読み、多くの文字がここで議論されている。パリはヨーロッパにおける服飾の流行や、洗練された言語文化や、優雅な礼儀作法の中心地であった。

英国人が机上の理論よりも実生活の経験によって進歩していく行動人であるとすれば、フランス人は思考それ自体に熱中し、思考の結果である行為にはあまり関心を持ちたがらない観念人である。フランス人の特性は、秩序が整然としており、論理が通っていて計画的であるということである。

例えば英国のロンドンの街路は解り難いが、パリの街路は幾何学的に入念に設計されていて一目瞭然である。ロンドンの街路は自然発生的にでき上ったものであるが、パリの街路は計画的に設計されてでき上ったものである。ルイ十四世の記念広場である八角形のバンドーム広場は、まわりをすべて石造建築物でかこまれており、中心には高さ四四メートルのナポレオン一世による記念柱が建てられている。四角形のボージェ広場をかこむ各建物は大きさ、様式ともに均整と調和を保ちながらも画一的ではなく、それぞれ個性を持っている。フランス人は均整、調和を愛好し、そのような精神がパリ市独特の美観を構成しているのである。

ロンドンのトラファルガー広場では、円柱の一方の側には馬乗の銅像があるが、他方の側には何もなく、全く不
完全であるが、だれも氣にとめる者はいない。しかし、それが美しいことには変りがないのである。

論理的なフランス人は教育に対しても、目的意識を明確に持つて、未解決な問題に立ち向かうという姿勢で処理
する。経験的な英国人は教育に対しても、すでに解決済みの、十分に考えぬかれた経験的方法によって処理する。
たとえば、その方法が完全な解決に至る方法ではなくても、またどんな場合にでも適用できる解決方法でなくても、
英国人にとっては十分に満足しうるものなのである。英国人は実際の生活経験を重視するために、陸地に上った船
乗りや、徒歩の騎士に対しても同じく、完全なものに対しても好意を示さないのである。

フランス人の思考の特色は一般化と先見にある。それゆえ、フランス人は理論化したり、論理を通したり、觀念
を秩序立てたりすることを重視し、明晰な思考と計画化を尊重するのである。「明確でないものはフランス語では
ない」(U. 38)のである。たとえば人間味が犠牲に供されていたとしても、論理的にみがき上げられ、細部に至るま
で慎重に検討された計画が実行のためには必要なのである。実行は理性の法則に従わなければならない。人間の行
動が一時的な感情に押し流されることは嫌がられるのである。

フランス人は個人主義者である。しかしその個人主義は理性と論理を信頼し、理性の法則によって決定されるの
である。英国人の個人主義は各人好むがままの生活の精神によって統制されており、功利主義的で感情的である。
それに対してフランス人の個人主義は合理的で知的なのである。フランス人は個人主義者であるから、どんな思想
であつても、それにかぶれてしまうことを嫌うのである。

フランス人の理想の人間像は知的、精神的に完成された「紳士」(U. 20)である。知性は万物の尺度としてみな

キェルチニール・ゼネラル
されており、一般教養の教育を通じて陶冶されるのである。「紳士」教育は早期専門教育ではなく、一般教養教育であり、たんに事実を詰めこむだけの教育ではなく、精神を鍛練する教育である。

フランス人は英国人のような集団行動の才能を欠いているために、社会生活に必要な法の支配と秩序を甘受するのである。フランス人の秩序は規則中心であり、組織的で均整がとれていて、中央集権的な官僚統制になじみやすいのである。英国人は多様性と多面性を好むのに対して、フランス人は画一性と均整美を好むのである。事実、フランスはヨーロッパでは最初の統一国家を形成したのである。

このような英仏両国の国民性の相違は、一方は陸地で、四囲の国々からの侵略にたえずさらされてきたために、国情が不安定であつたこと、他方は四面海に保護されて国情が安定していたことから生じたものと考えてよいであろう。

英国での社会性陶冶のための訓育は、運動競技の規則を遵守することからくる意志の訓練の結果であるが、フランスの訓育は個人主義の肥大化にともなう危険を緩和するために、外部からの抑制を自覚的に受容させることにある。それゆえフランスの訓育は社会的にも個人的にも自己統制の結果ではなくて、外部からの、家庭や教会や国家を通しての規律の内面化の結果なのである。英国における集団意志によって規制される自発的活動を通しての性格教育の実践と、フランスにおける小学校時代からの直接的な道徳教育と、合理的生活様式の尊重ということを通しての性格教育の実践との相違は、英仏両国における個性なり人格性なりの考え方が異なっていることを示しているのである。

フランスでは、個人は他者とは異なっているという事実によって個人なのである。個人は、万人に有効な真理の

良心を代表し、また万人に共通な義務を遂行する意志を代表する程度に應じて人格なのである。個人は人格にまで陶冶されなければならない。個人は自ら個性ある人格とならなければならない。それが教育の仕事であり、個人にとっては生涯にわたって努力していくべき仕事なのである。

人格の尊重ということは、個人が国家の理想と文化に調和して社会化されることが重要であることを示している。国家的連帯は個性を人格にまで陶冶してはじめて保証されることになる。それゆえ教育はたんに国家行政の權威の受容によって統制されるのではなくて、教育内容自体の法則によっても統制されなければならない。そうだからといって、教育内容や教育課程はそれ自体が目的なのではない。つまり、それらは思考力の発達のための手段でしかないのである。したがってフランス教育の目的はフランス的教養の獲得と、その知的伝統を維持し発展させていくことになるのである。

フランスにおいて教養人とは明晰な思考のできる人であり、思考活動において秩序を一般化し、提示しうる能力をもった人である。理性、論理の首尾一貫性、整然たる秩序というようなフランス精神の基盤は、決してたんなる言葉の上だけでの見せかけといったものではない。英語で、「善良であれ！」という言葉は、フランス語では、「合理的であれ！」とか、「賢明であれ！」という言葉に対応しているのである。かくしてフランスの学校教育は個人の知性を鍛えれば鍛えるほど、ますます人間らしい生活へ導いていくことができると確信しているのである。

それゆえ、フランスの教養人とは明晰な表現力と、繊細な優雅さをもった人である。政治家であっても、その政治的信念を国民の前で発表する時には、できるだけ文学的な格調の高い表現で訴えようと苦心するのである。おそらくフランスの学校教育ほど、文学偏重の知育が徳育と同一視されている国はないであろう。フランスの学校は、

「哲学、文学および主知主義」(16, 20)の教育において、世界でも比類のない成果をあげているのである。

このような知育偏重の風潮は、教育制度においてフランス特有の試験制度を産み出したのである。これまでのフランス教育制度の特質は、初等、中等、高等の全段階において、国家資格試験制度が階層的に組み込まれていることにある。教育方法は国家資格試験をめあてとした知識の注入であって、主知主義の頂点に立っている。これまでのフランスの学校は、もっぱら「合理性、最小限の健全な(各人の力量にふさわしい)知識、公的生活の競争のための準備」(14, 49)に重点を置いていた。

それゆえ、フランス教育の推進力は優秀な選良者を標準とする試験制度である。事実フランスの教育は、初等教育より高等教育に至るまで試験万能の教育である。その試験は入学試験の形式をとらないで、がいて資格試験の形式をとるところに特質がある。とりわけ大学入学資格試験はつねに「フランス教育の中枢」(14, 27)であった。中等学校卒業者も、国家試験である大学入学資格試験に合格してはじめて、中等教育修了が認定されることになり、全国いずれの国立大学への入学資格も取得できることになり、国家および地方公共団体の公務員として就職し、立身出世していく条件も取得できることになるのである。

このようにフランス学校教育は、高等教育における官公立大学・中等学校教授資格試験をはじめとする各種の競争試験によって、知的学力競争舞台の観を呈しているのである。

これは試験の合格者が栄誉と利益の両方を与えられるからである。試験の合格は、確実に立身出世の門戸を開放するばかりでなく、社会階級の上昇移動も可能にするのである。

社会の下層階級出身者であっても、天分があれば官公立中等学校の給費生となり、大学入学資格試験に合格して

国立大学に進学し、また高度な学力を身につけているならば、さらに国立専門大学校入学試験の難関を突破して、国費で高等教育を受け、確実に高級官僚や技師、学者または政治家として活躍できるようにするのである。

知的学力が将来を決定し、知的学力はただ競争試験によってのみ証明されるのである。このような競争試験制度と給費制度のしくみによって、無産者大衆階級から有産者知識人階級へと上昇移動することができるのである。

この意味において、フランスの学校は厳しい「社会淘汰」(33, 279)の機関となっているのである。小学校においてすら、一定の学力水準に到達していなければ、容赦なしに大量落第がおこなわれているのである。中等学校教育も中等教育のしめくくりともいふべき大学入学資格試験によって支配されている。大学入学資格試験は中等学校の教育水準に甚大な影響を及ぼしており、中等学校独自の新教育の開発や実験をとすれば押しつぶしがちなのである。

教育社会学者デュルケムは教育を「若い世代の方法的社会化」(34)と定義したが、フランスではその最も有力な方法として、国家的競争試験制度が定着しているのである。このような競争試験制度にあまり直接的関係をもたない分野、とりわけ音楽、美術などの情操性の陶冶とか、体育なども、学校教育においては、これまではどちらかといえば軽視されがちであり、知育偏重と試験万能が、フランス学校教育の著しい特質となっていたのである。

このような知育偏重と試験万能の風潮を産み出した社会的要因の一つとして、フランス精神の基調である合理主義をあげることができであろう。国家は優秀な人材を必要としており、「優秀者の指導的役割」(3, 157)に大きな期待をかけている。しかし優秀者を選抜するためには、教育の機会均等と、公平な採点法による厳重な試験制度が必要である。フランス民主主義は、その平等の原理の当然の帰結として国家資格試験制度に到達したのである。

とりわけ大学入学資格試験制度は、学校教育自体からの自然発生的産物というよりも、むしろそのような国家資格試験制度を設定し、維持し、補強し、発展させてきた政治的、社会的、経済的な諸条件と深く関係しており、重要な社会淘汰機能を営んでいるといわなければならない。

大学入学資格試験制度はその成立以来、現代に至るまで終始一貫して、フランス社会階級の間で最も強固な壁として立ちはだかつてきたのである。その意味では大学入学資格試験制度をはじめとして、一般に教育制度の研究は、なによりもまず「社会現象」(social phenomenon)として、したがって「人間社会の科学」として考察されなければならないであろう。

二 大学入学資格試験制度の社会的背景

大学入学資格試験の重圧は、教育機能においてよりも、むしろ社会統制のために長期にわたって営まれてきた選別機能において、顕著に認められるのである。フランス社会の各界において、大学入学資格免状、学歴、職歴は社会的威信を保持する社会階層体系内部の地位に応じて重視されているのである。

大学入学資格免状取得にともなう立身出世や、それを立身出世のための踏み台として利用することから生じた社会的隔差は、本質的には教育水準の問題である。しかし実際には大学入学資格免状は、取得者からみれば一定の学力段階であり、未取得者からみれば到達すべき目標それ自体なのである。

ここでは大学入学資格試験制度を純然たる教育問題としてよりも、むしろ国立中等学校第一学年入学者が、両親の経済水準よりも文化(教養)水準に依存しているというような社会問題として考察してみよう。

實際にフランス人の中等または高等教育に対する欲求水準は、社会移動の可能な範囲内での垂直移動にとどまることで満足してしまいがちなのである。それは、極端な場合には大統領職を夢見ている場合もあれば、立身出世の可能性を提供する大学入学資格免状の取得自体にだけ関心が集中している場合もある。

それらの事例をあげると、つぎの通りである。

「大学入学資格免状ノ わたくしにはよくわからない。わたくしはそんなものを取得していない。それは学業修了免状である。それは学業以外の事柄にも有効な働きをしている。それは能力を証明している。

わたくしには姪がいる。あの娘は小学校教師になりたいと望んでいる。そこで、あの娘は学業に励んで、大学入学資格試験に合格したいと望んでいる。」(家政婦 六〇歳)

「大学入学資格試験がどんなにばからしいものであったにせよ、それはどうでもよいことです。要するにわたくしがばからしいものだと言ったとすれば、わたくしは特別の才能がなくても、大学入学資格試験に合格できるのではないかと言いたかったのです。わたくしにとっては、学業は大学入学資格試験の合格後にしか興味のあるものとはならなかったのです。

ところで、どうして受験者たちは大学入学資格試験に関心をもつのでしょうか。あの人たちはたんにいくらかの知識を有する大学生になる以前の人間にしかすぎない。あの人たちは特殊な精神状態にある人たちであり、未熟な学生であり、すべての学業を棒に振ってしまうかもしれない学生なのです。」(医師夫人、理学士、植物学専攻、国立科学研究所員、二六歳)

大学入学資格免状取得者は、時には職歴や学歴において、職業適任証書(CAP)や高等教育の要求水準以

上に評価されている。大学入学資格免状がそのまま就職試験に代用されたり、大学入学資格免状によって証明される学業自体に関心が持たれたりして、免状固有の信用を得ている。この場合、大学入学資格免状取得者が従事している職業には、社会環境によって多少とも地位に上下の格差が見られるにせよ、だいたい有産市民階級^{ブルジョワ}に属する知識人とみてよいのである。

社会におけるある職業の重要性と、その職業に就職するための経済的条件の困難の度合いは、学業に対する評価においても重視されている。中等学校上級学年生徒のうちで、医学部入学を困難とする者は四四%であるが、農民・労働者階級出身者の場合には、その比率が六一%となっている。理学部は二九%、文学部は五%、法学部は五%である。

医師の社会的地位に対する尊敬の本身は、医学部進学の場合における客観的な経済的困難の度合いを反映しているのである。たとえば医学部では履修期間、設備費、単位取得の困難などの理由によって、学士論文提出にまでこぎつけるためには、平均十年間かかるのである。しかし少数の優秀な学生は、一カ年の予修学年を経由せずに、また大学入学資格試験に一発で合格した学生の六九%は、医学部の学業を首尾よく修了しているのである。

つぎに職業別社会階級における大学入学資格免状の価値に対する評価の隔差は、たんに両親たちの間だけでなく、裕福な家庭出身の生徒の間にもみられるのである。

職業選択調査において、中間・大衆階級出身生徒は、かなり高い頻度で一種類だけの職業を選択しているのに対して、裕福な生活環境出身生徒は、多数の職業の中から、どの職業を選択しようかと悩んでいる。つまり裕福な社会階級出身生徒にとって、就職の門戸は広く開放されており、職業選択はそれほど緊急に差し迫ったことでもない。

のである。

中間階層出身者は大学入学資格免状に対して、それぞれ異なる反応を示している。中間階層は、(一)職人と商人、(二)被雇用者と中堅幹部職員に大別することができる。商人階層は大学入学資格免状を職業機能面から評価している。商人階層はその子弟に中等教育以上の教育を受けさせる財産を所有している。かれらは大学入学資格免状および高等教育を、就職のための手段として考えている。

商人階層にとって、財産は大学入学資格免状と同じく有利な就職を保障する。つまり商人階層にとっては、中等教育以上の学歴や大学入学資格免状を取得していなくても、教育投資に見合うだけの資本を、営利的職業への就職に投資するならば、ほぼ同じ程度の投資効果を回収することができるのである。つまり商人階層にとっては、大学入学資格免状は、それ自体だけではなくの資本でもないわけである。

それに反して、俸給生活者にとっては、大学入学資格免状は生活の安定と、社会的地位を保証するものである。したがって俸給生活者とその子弟に中等教育以上の教育を継続して受けさせる可能性は、実業界の商人の場合とほぼ同じ程度になつてくる。

この場合、商人と俸給生活者は必ずしも同じ程度の教養水準を持っているわけではない。教養水準からみれば、商人と俸給生活者の間には著しい隔差がある。両者の共通点は、一般的には大学入学資格免状を取得していないということである。それゆえ、かれらの大学入学資格免状に対する態度は、教養水準と同じく経済事情にも依存しているのである。

ところで、商人と俸給生活者の教養水準が大学入学資格免状のそれよりも低いという事実、両者の受ける教育

の終点が、自動的に大学入学資格免状であるということにはならないのである。

商人にとって、大学入学資格免状の価値は、(一)教育期間が長期にわたること、(二)教育を受けなくても、もっと有利な就職が保証されていることなどの理由によって、かなり低く評価されているのである。言いかえれば、大学入学資格免状取得者であるということだけでは、営利的職業の場合には必ずしも有利な条件であるとは限らないのである。

この点について、パン屋経営者は、つぎのように述べている。

「大学入学資格免状は一つの段位にしかすぎない。大学入学資格免状はいまやまったくそれ以外の何物でもない。それは、(小学校教師の職業を除けば)実際にはなんらの販路ももっていない。有利な地位に就職するためには、さらに長期にわたる学業を継続していかなければならない。

本人が希望するならば、わたくしの息子は二十五歳まで学業を継続してもよいと思っている。もちろん難関を突破するだけの値打ちがあればだが。」

それに反して、俸給生活者と中堅幹部職員階層は、中等教育以上の教育を継続しない場合であっても、大学入学資格免状を重視している。そのうえ、かれらは時には大学入学資格免状を高等教育よりも高く評価している。

一般に俸給生活者にとっては、大学入学資格免状は重要な意味をもっている。俸給生活者や中堅幹部職員は、通常は中等学校卒業程度の学歴所持者であるが、その子弟のうちで大学入学資格免状の未取得者の比率は、きわめて低いのである。

大学入学資格免状は社会移動の激しい職業分野では、現在の地位の安定を保証すると同時に、地位昇進の機会も

提供するのである。

たとえば職業別社会階層出身者における大学入学資格免状の未取得率は、日雇労働者が一二・五%、中小事業経営者は一〇・二%に対して、俸給生活者と中堅幹部職員は三・二%なのである。

とくに公務員の場合には、その他の俸給生活者よりも、大学入学資格免状を重視している。公務員である父親の生涯にわたって越えることのできない障壁であった大学入学資格免状は、その息子にとっては、必然的に到達しなければならぬ水準の免状となったのである。公務員階層出身者の場合には、大学入学資格免状を、そのようなものとして意識せざるをえないような状況の中に置かれていたと言わなければならないであらう。

俸給生活者が大学入学資格免状を重視する理由は、就職した場合の経済的所得によるだけではなくて、大学入学資格免状取得にともなう社会的威信にもよるのである。社会的威信のために、ある職業への就職が動機づけられることもあり、また逆にある職業自体が社会的威信を必要とすることもある。

実際には社会的威信と職業は混同して見られている。業績（実力）だけで立身出世したある俸給生活者は述懐している。「そうですね！　ありとあらゆる水準が状況によってつくりだされていますよ。大学入学資格免状はある水準を設定しています。大学入学資格免状取得者や、大学教授のような人は尊敬すべき偉い人なのです。

大学入学資格免状取得者は初等教育修了免状しか持っていない、ひとかどの人物よりも、職制の中では速く昇進して行くでしょう。大学入学資格免状は人物の出身よりも信用されているのです。」(5, 28)

大学入学資格免状は、未取得者からみれば、前途に横たわる障壁であり、その難関を突破したすべての人を、同じ出世街道の出発点に並ばせるのである。つまり大学入学資格免状は、その取得者に対して、出身社会階級の隔差

から生ずるあらゆる不利な条件を帳消しにしてしまうのである。

大学入学資格試験は国家が公的に保証した重要な関門である。国家は大学入学資格試験によって、公務員の職場の中へ、優秀でない人が不当に進入してくるのを防止しているのである。ある人が有産中流階級の一員になるためには、なによりもまず大学入学資格免状を取得していなければならないのである。

この関門はまた水準でもある。この関門は、真理探究の喜びを解せず、意欲や知性にも乏しくて徒勞な努力に終りがちな學業を、もつと真剣な學業へ転換させるのである。真剣な、本物の學業における成績の個人差だけが、社會階級の中での隔差を正当化できるのである。中等教育を修了して、すぐに實際の社會へ就職する場合には、大學入学資格試験での成績はほとんど考慮されない。つまり大學入学資格免状は関門であると同時に水準なのである。俸給生活者の場合には、大學入学資格免状のもつ社會的威信に対して支持意見が多い。俸給生活者は、その娘に中等學校哲學級（完成學年）を再履修させることが多い。それは大學入学資格免状取得者と、そうでない者との間には根本的な隔差があり、難関を突破した人びとの生活共同体の中でも、著しい隔差がみられるからである。

大學入学資格免状を取得するまでに、どれだけ時間を要したかは、大したことではない。結果がどうであつたかが問題なのである。大學入学資格免状取得者の中に仲間入りしてしまえば、それに要した時間は、もはや考慮されない。大學入学資格免状取得者は大學入学資格免状取得者であり、大學教授は大學教授なのである。

それに反して、農民は、大學入学資格免状をあくまでも熱望する親たちを非難し、遅咲きの合格者を本物の合格者と同じように見ることを拒否している。なるほど遅咲きの合格者も大學入学資格免状を取得したのである。しかし一発で合格した人と、數カ年を要して合格した人とは、たとえその間の學業が有用であつたとしても、隔差が

ある。なぜなら浪人した者は貴重な時間を空費したのであり、本来、大学入学資格免状取得者になるべきではなかったからである。かれは、時間つぶしの受験勉強などを行わなければ、もっと他の有用な仕事に従事したかもしれないからである。

かくして大学入学資格試験制度は、社会的威信を保持する社会階級を再生産していくという社会機能の側面から考察する必要がある。現代フランスの社会構造においては、上流階級の人びとは、大学入学資格免状取得者の占めている社会的地位からみて、大学入学資格試験という社会淘汰装置の役割を弁護する必要もないほど、大学入学資格免状の特権を日々に確認しながら生活しているのである。

教養の優越性を保持することは、それ自体当然であるとみられているために、大学入学資格免状の特権もまたなんら問題にもされていないのである。大学入学資格免状を取得していないということは、人間として困難な努力をしなかったということであり、人間として不可欠なものを欠いているということにもなるのである。

もちろん大学入学資格試験制度が純然たる教育問題として、たまたま論じられることもある。しかしその場合でも、大学入学資格免状が社会階級の隔差を示しており、一般教養の隔差を暗黙裡に前提条件として論じられているのである。

大学入学資格免状は、人間として必要不可欠な一般教養のあるなしを証明するのである。ある人が大学入学資格免状を取得しているかどうかは、実業家の令嬢と家政婦とのちがいが一見してわかるように、すぐにわかるのである。

職人や農民階層の人びとの大学入学資格免状に対する認識は、たんにその教育水準や経済的条件だけに依存して

いるのではない。職人や商人としての社会的地位自体が、社会での下層階級に固定して位置づけられており、そのことがまた、かれらが中等教育や大学入学資格免状を無視したり、それに馴染まない態度をとらせることにもなっているのである。

そのような態度は、中等教育や高等教育の必要性とか、社会階級内部での上昇移動に対する期待を薄めさせることにもなっているのである。

「あなたは、どうしてあの可愛い娘っ子の小学校教師を、お気に召さないのですか？」

「わたくしが、あの小娘の小学校教師をばかにする理由は何かといえば、こういうことですよ。

わたくしたちにとって必要なのは、小作農契約者を再雇用するということです。それなのに、学校は怠け者ばかりを育てるのにおあつらえむきなのです。

学校へ行っている子供たちを見なさい。小ましゃくれた、いたずらっ子や、泥だらけになったお尻を突き出している子供たち。土地はやせてしまい、太陽は暑い。あの子供たちは事務所の中の暖炉の側に坐りたがっている。

小作契約の農民となるはずの人びとは、わたくしたちのもとから去って、都会の職場へ出て行ってしまうのです。土地を耕作するには多勢の人びとが必要です。それなのに、そのような人びとがこの土地から脱出して行くのであれば、貧乏人どもはくたばってしまえだ。

あなた方にも息子さんがあるとしても、別段にこれといった心配があるわけでもないでしょう。しかし、わたくしたち農民にとっては、息子を自慢したいくらいではあっても、あいにくと息子は破れかぶれなのです。息子はやわたくしたちの農業の場に安住してくれそうもないのです。息子は多くの事柄を学んだ。わたくしはもはや息

子と話すこともない。息子は父親のわたくしや祖父をばかにしたりするのです。

わたくしは、息子が学校で学んだ事柄に対して、まったく尊敬する気持ちも起らない。わたくしもラテン語を学んだことがあるが、いったい、どんな役に立ったのかとおたずねしたいですね。ラテン語はいささかも役に立っていないのです。ドイツ語だってそうだ。戦争でもあれば、ドイツ語は役に立つかもしれないが。

食糧の需給関係からみれば、小作契約を継続していかなければならないのだから、農民はもっと農業の場にふみとどまる道徳的義務があるのではなからうか。」

それゆえ、大学入学資格免状は、たんに就職とか学業の面からだけで考えられてはならないのである。それは社会によって決定される隔差の象徴なのである。とくに農民や職人階層出身者であって、大学入学資格免状を目ざして進学する者は、その出身階級の生活環境から絶縁することになるのである。かれが、大学入学資格免状取得後に大学へ進学することは、そのような進路を選択した場合の当然の結果でしかないのである。

農民または職人階級出身者にとって、国立中等^{ちゅうとう}学校への入学は、かれを取巻く生活環境が一変してしまうのである。しかるに俸給生活者の子弟にとっては、それは現在住んでいる生活環境への入門であるにすぎない。

農民の子弟にとって、農村と都市との地理的距離の隔差は、これまでの生活との絶縁を意味しているのである。俸給生活者階層出身の大学入学資格免状取得者の場合には、自分自身の所属する社会階級が、社会において占めている役割を遂行するための教育を受けることにすぎない。かれにとっては、それ以上の何ものでもなく、ただそれだけのことである。

しかし、職人または農民階級出身の大学入学資格免状取得者の場合には、長期間にわたって孤立しており、その

出身階級からも疎遠になり、その生活規範からもはみ出してしまふのである。

国立中等学校七年間の学業修了にともなう、人生最大の賭での成功は、必然的に社会に対する要求水準を高めることになる。大学各学部への進学は当然の人生行路となり、とくに俸給生活者の子弟の場合には、地理的にも有利になるのである。

大学入学資格免状は教養の隔差の象徴としてみなされている。つまり教養のあるなしは、たんに大学入学資格免状を取得しているかどうかという形式面からだけで、判定されるのである。

社会各界においても、このような隔差が認められる。たとえば中等学校第一学年入学者の学業成績は、その親が大学入学資格免状取得者であるかどうかによって、著しい隔差がみられるのである。

博物館入館者の半数以上は、大学入学資格免状取得者である。つまり所定の目的をもった業務上の理由からの入館者は、ほとんど大学入学資格免状取得者なのである。このような入館者相互の間での教養水準のほんの僅かの隔差も、一般入館者のそれとくらべると、かなり大きな隔差に拡大するのである。これに反して、大学入学資格免状取得後の、高等教育での履修期間の長短による教養水準の隔差は、それほど大きくはないのである。

さらに中等学校第一学年入学時の優等生の比率も、その両親の教養水準の隔差によって変動している。父母のうちの一方が大学入学資格免状取得者である場合には、優等生の比率は六〇%から六五%に達しており、両親共に大学入学資格免状取得者である場合には、七七%にも達している。

ところで家庭環境のかもしれないが、優等生の比率を上昇させる一つの要因ではあっても、その効力には上限がある。それゆえ、大学入学資格試験の学力水準は、きわめて重要な出発点となるのである。

大学入学資格試験の受験準備教育の内容がどうであるかという問題は、社会的威信を保持する社会階級への移動を保証する大学入学資格免状の効力の格づけにも、直接に関係するのである。大学入学資格免状取得者と、そうでない者との対立は、社会制度をめぐっての対立なのである。

大学入学資格免状取得者としてふさわしい行動様式をとる者の地位に就職することは、初等教育系统出身者とは異なる行動様式をとることになるのである。この両者の統一は、かれらの相互関係において共通に対立している事柄だけに限られるのである。

フランス社会では、大学入学資格試験は、成人式のような人生における通過儀式と同じように重視されている。しかし大学入学資格試験だけが、そのような成人式的役割を遂行しているわけではない。ある場合には、各種教育修了証書、初聖体拝受、兵役といったものも、そのような役割を遂行しているのである。

大学入学資格試験はたんに成人社会への入門を象徴するだけでなく、教養人階級への入門も象徴するのである。このような大学入学資格試験の役割や特質は、過去からの歴史的発展過程の中で構築されてきたのである。大学入学資格免状取得者供給過剰問題は、年間十万人の免状取得者を生産している現代だけでなく、年間四千人の免状取得者しか生産していなかった十九世紀中頃においても、すでに発生していたのである。

俸給生活者階級は、(一)経済的地位と社会的地位、(二)職業と生活水準、(三)威信と生活様式をそれぞれ区別することによって、中間階級(有産小市民階級)としての地位を、大学入学資格試験という関門によって維持しているのである。

つまり社会において物質的な生産手段を所有していない俸給生活者階級は、その職業分野への就職条件を厳しく

したり、また就職と昇進の可能性や、社会階級内部での上昇移動への期待を抱かせる大学入学資格免状の実質的価値を、不斷に引き上げて行こうとする傾向をもっているのである。

俸給生活者階級は、(一)社会において中間階級の地位を占めていること、(二)中間階級であることによって、大衆階級よりも上位の階級の教養価値を意図的に引き上げていくこと、つまり中間階級と大衆階級とを区別することによって、相対的に中間階級の威信を高めて行こうとする傾向をもっているのである。

このことは、中間階級の社会的威信が、たんに職業だけでなく、社会移動の可能性や就職機会が、本質的には教養判定装置として社会制度の中に組みこまれている大学入学資格試験における合否如何に、かなりに依存しているということとも関係しているのである。

かくして、社会階級ごとに大学入学資格免状の価値に対する評価に隔差があること、また俸給生活者階級にとつて、大学入学資格免状の価値の意味づけは、たんなる教育の次元からだけでは説明しきれないのである。それは社会階級ごとの経済的事情とか、社会における階級的地位とか、社会的威信の階層的体系などの次元からも、あわせて考慮しなければならないのである。

中等学校教育の締めくくりともいふべき大学^{バカ}入学^{カレッジ}資格試験制度のような重要な教育制度は、たんに教育的観点からだけではなくて、一国の社会制度や、経済制度や、社会的威信体系などの全体的な文脈の中に、正當に位置づけて考察しなければならないであろう。

三 大学入学資格試験制度の特質と今後の課題

中世以来、大学における上級学部進学資格免状は、大学が学士号と博士号の前に授与する第一次学位であった。十六世紀以後は、このような上級学部進学資格取得試験は、バカロレア試験と呼ばれるようになった。

十九世紀初頭におけるナポレオン一世による教育制度改革は、それまでの自然発生的な大学上級学部進学資格試験の性格を一変させることになった。ナポレオン改革以後の教育の本質的問題は、「国家のための人間」(フーコー)を陶冶することになったからである。

法学部と神学部におけるバカロレアは、従来通り高等教育履修認定免状であったが、文学部と理学部が授与するバカロレアは、国家が認定する中等教育修了免状となり、高等教育機関である大学各学部への入学資格ならびに国立専門大学校入学試験の受験資格の性格を持つことになった。大学文学部・理学部が中等教育修了を認定する法的根拠は、文学部・理学部は革命期までは人文学部と呼ばれていて、上級三学部の神学部、法学部、医学部への進級資格を認定していたからである。つまり旧大学人文学部は、もともと中等教育機関であったのであり、ナポレオン一世による教育改革によって高等教育機関へ昇格したのである。

それゆえ、文学部・理学部は中等教育の「教育権」を新設の国立中等学校へ移譲したが、中等教育修了認定権、つまり大学各学部入学資格試験を実施する「試験権」だけは、依然として保有しつづけたのであると考えられるのである。このように大学入学資格免状が、国家認定の、大学が授与する第一次学位であるという基本的性格は、今日に至るまで一貫して持続されてきているのである。

大学入学資格試験は、当初は口述試験だけであつたが、一八三〇年に国語論文の筆記試験が加えられた。さらに一八四〇年には国語論文に代つて、ラテン語仏訳、また一八六四年にはラテン語のほかに哲学も筆記試験の科目として加えられたのである。

さらに大学入学資格試験は、一八七四年には第一部試験と第二部試験とに区分された。一八九〇年には、これまで文学大学入学資格試験の補充的役割を遂行してきた科学大学入学資格試験は、中等学校の最終二カ年間の教育の締めくくりとなり、独立した。

一八八一年以後、大学入学資格試験の専攻科に近代科目専修科が加えられた。一八九一年には、それは近代課程中等教育大学入学資格試験となつた。

一九〇二年のレイグ文相による教育改革は、中等教育の各専攻科における同等性の原則を認めたが、古典課程および近代課程大学入学資格試験の各専攻科にも同等の効力を認めて、中等教育大学入学資格試験という名称によつて統一したのである。

一九二五年、一九四一年、一九四五年における中等学校教育課程の改革は、大学入学資格試験の各専攻科の試験科目にも影響を及ぼした。

また中等学校における技術科教育の組織化は、一九四五年に技術科大学入学資格試験を新設させることになった。この技術科大学入学資格免状の効力は、他の専攻科の大学入学資格免状の効力とまったく同じであつた。

大学入学資格試験は、中等学校の第一学級と完成学級の最終二カ年間の学業を認定する第一部試験と第二部試験を、長い間にわたつて維持してきた。しかし、一九六三年には、哲学科、実験科学科、数学科、数学・技術科、経

済・技術科の各専攻科の、旧第二部試験に相当する、ただ一回だけの大学入学資格試験に整備された。ただし、受験者の方は、旧第一部試験に相当する学力証明試験に合格していなければならなかったのである。

一九六五年以後は、この学力証明試験は廃止された。ただ一回きりの試験となった大学入学資格試験は、直接に高等教育の各専門領域に緊密に結びつけられるようになった。試験は七月期と九月期の年二回実施された。

一九五九年には年間の試験期は、ただ一回だけに削減されたが、一九六五年には再び年二回に復活した。これらの部分的修正にもかかわらず、大学入学資格試験は依然として官公吏などの公職任用に不可欠な一般教養試験の性格を保持しつづけたのである。

一九六八年の改革によって、大学入学資格試験は、A哲学・文学科、B経済学・社会学科、C数学・物理学科、D数学・博物学科、E数学・技術科の五種類の専攻学科に区分されることになった。A哲学・文学科は文学部と法学部、B経済学・社会学科は文学部（社会科学系）と法学部（経済学系）、C数学・物理学科は理学部（数学系と物理学系）、D数学・博物学科は理学部（博物学系）と医学部および薬学部、E数学・技術科は理学部（工学系）と技術短大部というように、それぞれ大学各学部に直結するようになり、口述試験も大幅に復活した。なおD数学・博物学科からはD'農学・技術科が分化してきている。

一九七一年度のA哲学・文学科は、①ラテン語・ギリシア語、②ラテン語・外国語、③ラテン語・数学、④外国語・数学、⑤第一外国語・第二外国語、⑥音楽教育、⑦造形美術の八種類の専攻学科にさらに深く専門化している。一九六九年以後に新設された技術者大学入学資格試験は、その後毎年のように新しい技術系統の専攻学科を増設してきており、ますます専門化と多様化の傾向を強化してきている。一九七二年度においては、秘書科、簿記会計

科、商業技術科の商業系三学科と、機械工学科、電子工学科、電気学科、建築学科、物理学科、化学科、生物・生化学科、情報科学科の工業系八学科が設置されている。今後はさらに社会福祉学科、公共団体事務科、精密機械工学科なども増設される見込みである。

このように最近の大学入学資格免状は、中等教育修了認定証書であると同時に、一種の国家公認職業資格免状の性格を、ますます濃厚に帯びるようになってきている。将来においても、科学技術の革新と、現代社会における科学技術者に対する需要の増大につれて、大学入学資格試験における技術科系統の専攻学科は、ますます多様化し、分化発展して行くであらう。

これまでフランスにおいて、大学入学資格試験制度ほど、つねに厳しい批判にさらされてきた教育制度はない。しかし、何と言われようとも、大学入学資格試験制度はすでに一世紀半以上にもわたる年輪をきざみこんできており、完全にフランス社会の中に溶けこんだ慣習となつているのである。

しかも、フランス社会の特質は、安定した静的な社会ではなくて、きわめて變動に敏感な、動的な社会であるといふことである。この古い由緒のある教育制度が、毎年フランスにおいて惹き起す教育・社会問題、それにともなう個人と集団の熱狂ぶりは、遅かれ早かれ、必ずやまた新しい改革を必要とするようになるであらう。

いずれにせよ、大学入学資格試験制度が現在到達している段階は、現時期の国家と社会の要請に即応した、暫定的な教育制度であるにすぎないのであつて、富と余暇が増大する未来の社会での新しい要請に対しては、また新しい性格の教育制度を必要とするようになるであらう。

したがって、古い伝統と歴史の中で育まれてきた大学入学資格試験制度は、つねに新たに脱皮し、新しく再生

していかなければならないのである。いかなる教育制度であっても、つねに弾力的な、柔軟な英知が、その改革の根本精神として尊重されなければならないのである。

これまで大学入学資格試験制度の起原から、その成立と確立の過程、さらにその近代化と統一化の過程を経て、現代の大衆化過程に至るまでの発展過程を丹念に掘り下げることによって、大学入学資格試験制度の基本的特質を究明し批判してきた。もし教育制度の社会的意義と存在理由が、現実の社会の要請に適應して行くと同時に、社会の進歩をも指導し推進して行くことにあるとするならば、大学入学資格試験制度ほど、この保守と進歩という二つの機能を、社会において遂行してきた教育制度はないであろう。

たとえば、試験科目についてみると、大学入学資格試験制度の制定以来、終始一貫して有力な地位を占めてきた科目として、ラテン語がある。ラテン語古典文明の正統の継承者としての自尊心をもつフランスは、フランス的教育の中核として、ラテン語をつねに尊重してきたのである。

十九世紀においては、ラテン語となんらの直接的な關係をもたない職業分野に進出する者に対してすら、ラテン語教養は必須とされていたのである。

一八五二年の文・理科履修分岐制度の制定までは、科学大学入学資格試験の受験者であっても、ラテン語を中心とする文学大学入学資格免状を取得した後でなければ、科学大学入学資格試験に合格したとしても、大学各学部への入学資格を取得することはできなかったのである。つまり科学大学入学資格免状は、あくまでも文学大学入学資格免状の補足的なものとしての効力しか持っていなかったのである。

このようにラテン語教養が大学入学資格免状取得者の象徴のように見なされてきたのは、なぜであろうか。それ

は伝統的に裕福な有産市民階級の子弟だけが、ラテン語を中心とした中等教育の恩恵を受けることができたからであり、ラテン語古典教養は、とりもなおさずかれらを大衆階級出身者と区別するための「貴族の資格」として見なされたからにはかならない。

それに反して、新興の教科である科学は、つねに進歩的な社会階層出身子弟の教養の象徴として見られたのである。そこから十九世紀を通じて、科学の地位は進歩的な社会階級の勢力の消長に応じて、すくなくとも表面的には最も著しい仕方であ動したのである。

実際、科学は、一八〇二年から一八八七年までの中等学校教育課程表において、時には学年全部にわたって同等に膨張していたり、時にはただ一つの学年にだけ集中していたり、また正規の教科の外へ陥落して副科目になってしまったり、そこから脱出したりという具合に、著しく不安定な放浪状態を続けているのである。

ところで、教育課程表における科学の地位の、このような変動と不安定性は、決して特定の人や、特定の状況によって生じたものではなくて、フランス革命以来の社会的原因によってもたらされた慢性状態なのである。

そのような不安定性は、フランス社会の病状の原因ではなくて、むしろその結果なのであり、外面的徴候なのである。中等学校教育課程表が、科学の取り扱いをめぐって、多種多様に組み合わせられたり、また周期的にくずされたりしたのは、このようなフランス社会の病状を正確に診断できなかったことにほかならないのである。

そのような科学の地位の混乱と不安定性の一要因として、とくに政治的な偏見や先入観が、教育思想に混入してきていることをあげることができる。もともと大革命期までの中等教育においては、古代のギリシアやローマの古典精神とキリスト教精神との間には、本質的な対立が見られたのである。文学教養、とりわけ異教から素材を得た

文学教養は、キリスト教信仰から離れさせる危険のあるものとして、キリスト教神学者によって警戒されてきたのである。ところが大革命以後の社会変革によって、十九世紀以後のフランスでは、「人文主義と教会との同盟」(3, 174) が成立したのである。

伝統墨守の保守主義者は、宗教、社会、政治の事柄において、その是非はともかくとして、古い文学教養をかれらの神聖な教義の最良の補助者と見なしたのである。それに反して、革新的な自由主義者は科学教養に味方したのである。そのため権力の座にある政党が、未来を志向する進歩派であるか、または過去に志向する保守派であるかによって、科学教育は当然に両極端の間を激しく動揺することになったのである。

統領政府および第一帝国政府は科学、とりわけ数学を重視した。算数、幾何学、代数学、三角法、測量学、それに少しばかりの光学、天文学も中等学校第一学級教育課程に登場したのである。

王政復古政府は、科学系統のすべての科目を中等学校の第二学級、修辞学級、哲学級の上級学年教育課程から追放した。博物学だけは第三学級と第四学級に配当されていたが、独立した教科目とはいえないような状態であり、わずかに週あたり二回の「自然科学初歩」に圧縮された。一九二八年に自由主義者バチムニ文相の登場とともに、科学に対する圧迫も緩和されて、科学は中等学校教育課程の中で大幅にその地位を回復し始め、すべての学級(学年)に配当されるようになったのである。

七月王制政府時代には、進歩的なギゾ文相は科学の地位をさらに前進させた。しかしビルマン文相時代には科学の地位は後退し、サルバンディ文相時代になって、ふたたび科学は元の地盤を回復することになるのである。このような往復運動は、二十世紀始めに至るまでくり返されたのである。

ところで、ラテン語中心の人文古典科については、一八七〇年の普仏戦争後にシモン文相は、人文古典科の旧式な教授法に対して、痛烈な打撃を加えている。中等学校教育課程からラテン詩は姿を消し、仏文ラテン訳とラテン語作文は、その地位をラテン語訳読へ譲渡したのである。

しかるに、すこし後になって政治の反動期が来ると、中等学校教育界にも反動の波が押し寄せて来て、教育課程と教授法は元の状態へ戻ってしまうのである。

このように十九世紀の中等学校教育課程においては、ラテン語古典科と専制主義的保守反動政權との緊密な関係を認めることができるのである。もちろんラテン語古典教養の重視が、直ちに特定の保守的な政治態度を受け入れたり、押しつけられたりするというわけではないが、事実上、保守主義精神とラテン語古典教養尊重精神との結合は、疑う余地がないのである。

それでは、これら二つの精神は、どのような理由で結合したのであろうか。大革命期の中央学校エコール・セントラルにおいては、科学が優位を占めていた。フランス社会における科学に対する反感は、この大革命の時期から起っている。聖職者にとって、ラテン語古典教養反対者とは唯物論者、無神論者、革命家、社会主義者よりほかの何ものでもなかった。つまりラテン語古典教養の後退は、とりもなおさずキリスト教信仰の土台をゆさぶる結果になると考えられたのである。

なるほど、人間の高貴な精神活動の所産である文学と、物質界の法則である科学、自然界の法則を決定し記録する科学、すなわち精神界と物質界、また神聖な事柄と世俗的な事柄との間には、完全な相違点が存在している。

ここから、キリスト教徒や他の人びとにとって、人間においてこそ、人間の本性、万物の霊長である人間に独自

な属性を形成しうるのであって、物質界を対象とした科学だけを教授する学校で児童生徒を教育するのは、かれらを物質化し、その神聖な本性を汚し、その真の本性の発達を妨げるものであるという意識が生じたのである。

したがって、文学教養か科学教養かという二者択一を迫る教育問題が起つて来た時には、文学教養は、かつてキリスト教の教義に対する不信感を注入したりしたにもかかわらず、科学教養に対する保守派の人びとの根強い反感から、有利に拡大解釈されて、真に人間らしい精神を育成することのできる、唯一つの教育であると見なされるようになったのである。

これに反して、生活の物質的要求に活潑な感情をもつ人はだれもが、生活上の利害打算から、また事物に直面して途方に暮れてしまうのはよくないということから、科学を教授しないような教育は、必然的に無用の余計な仕事であると考えようになつたのである。

このような矛盾が解決されない限り、また文学と科学という二つの価値体系には序列は存在しないし、どちらかを選択しなければならぬという必要もないのだということが理解されない限り、人びとの意識が一方から他方へと交互に、両極端へ傾斜することを避けることができなかったのである。

ここから十九世紀における中等学校教育課程、ひいては大学入学資格試験の試験科目において、あたかも天秤の上下運動のような変動と混乱が起つてきたのである。

このような変動を終らせる、ただ一つの方法は、ただ一つと同じ目的に向つて協力させる方法、すなわち相互に正反対を向いていた文学と科学という二つの教育を和解させる方法を発見することである。

ところで、このような絶えざる変動と混乱の渦中にあつたにもかかわらず、ラテン語古典科目と科学科目とが、

たとえ一時的には姿を消すことがあつたとしても、その直後に再び登場して来たり、増大してきた社会勢力によつて、新たに強化されたりするという事實は、これら二つの教養が、緊急にして不変の社会的要請に應じていたのであるということを証明しているのではなからうか。

とりわけ、社会における職業の多様化と専門化の傾向が進むにつれて、中等学校の教育自体も、その古い統一性を放棄し、多様化させていかなければならなかつたのではなからうか。もともとフランス社会の統一こそは、官公立学校教育団体が創設された根本的理由であつたのである。一八四七年におけるサン・マルク・ジラルダンの言葉にしたがえば、「官公立学校教育団体は一つでなければならぬ。なぜなら社会は一つだからである。また社会における教育は多様でなければならぬ。なぜなら現在の社会の職業は本質的に多様だからである。」(3, 177)

すでに統領政府時代において、将来の職業軍人志願者のために、特別の教育を組織化することが考慮されなければならなかつたのである。この学校では、一定の年令以上からは、科学の授業がラテン語など人文古典科の授業に代つていた。こうした教育組織は、コレージュ・ルイ大王校の建物内に設置されていた、陸軍幼年学校という唯一つの教育施設で試みられただけであつた。

ところが七月王制政府時代には、クーザンは、この案を「プロシア王国中等教育論」の中で再び取り上げたのである。そこでは、中等教育の文法学級(低学年)は二つの部門に分かれることになっている。すなわちラテン語古典を中心とした人文科教育が伝統的な学習計画にしたがつて展開される部門と、科学が文学よりも優位を占めているが、文学もいくらかは含まれているような部門とが設置されている。クーザンが文相に就任した時、この案は全面的には実施に至らなかつたが、第四学級(上級学年)以後の生徒に対しては、純然たる文学科から科学専修科への

転科を認める履修制度を組織したのである。

このような制度は、その後一八五二年四月一〇日にフォルトゥル文相によって、文理科分岐履修制度として確立されたが、しかしそれは決して一時の思いつきでなされたのではなくて、過去からの長期にわたる発展の産物であったのである。

この制度はデュルユイ文相まで続くが、それによると、生徒は第四学級以後は、一方はラテン語とギリシア語を学習する組と、他方はラテン語と科学を学習する組の二部門とに分れることになる。これがフランス中等学校におけるラテン語・科学履修組の原型であるが、この文理科分岐履修制度の起原は、フォルトゥル文相やクーザン文相の制度からさらに、大革命期の陸軍幼年学校ブリキ・フランセーの制度にまでさかのぼることができるのである。

一八五二年は第二帝国政府時代の初まりであつたが、この時はまったくの知的沈滞期であつた。政府は自由主義の復活を極力警戒して、学校教育から、それが精神に対してもつ人間形成的な、強化的な要素を排除すること、つまり教育を不毛にすることに没頭したのである。それゆえ、たんに文理科分岐履修制度だけでなく、当代のすべての教育方法は暗い記憶しか残さなかつたのである。中等学校生徒は第四学級以後は、ラテン語・ギリシア語科とラテン語・科学科のいずれかを選択しなければならず、かれらは部分的には共通の文学教育を受けていたが、本来、この文学教育は双方のそれぞれに対して異なるべきものであつたと考えられるのである。

一八二二年以後の中等学校においては、将来、大学への進学を志望しない生徒であつても、科学・哲学科（最上級学年）へ進級することができるようになつたが、それらの学級では現代史も講義されていた。これは新しい学級の出発点であつて、その特色はギリシア語とラテン語のない教育であつた。

このような近代科目専修學級は、一八二八年にバチメル文相によって發展させられ、ついでギゾ文相によってさらに拡張されたが、ギゾ文相は、少なくとも學者的研究とは必然的な關係はないが、その數、その活動、およびその國家の勢力と安定に対する影響力からみて重要な、職業と社會的活動に適合した教育を設置する計画をもつていたのである。それは、當時においては「インストリクショナル・アカデミカル・エデュケーション」と呼ばれていたが、この「中間教育」は、一八六五年にデュルユイ文相によつて、「專科中等教育」(Spécialité) という名稱によつて實現された。この「中間的」という表現自体、またすこし矛盾した中等と專科という二つの形容詞の並置は、この新教育を特色づけるために用いられたのだが、なおこの教育の構想にはあいまいなものがあつたことを示しているのである。

實際、この新しい型の教育に対して、兩立しえない異質的な、二つの役割が与えられていた。一方では、それは一部の生徒に対して、古い古典教育の代替えをするものであること、すなわち、いくらかの程度の差はあるが、古典教育と同じく、精神の一般的教育に資する面と、他方では同時にまた、それは一定の職業へ準備する面、したがつてある程度は専門的な性格をあわせ持つていたのである。このような教育目的のあいまいさが、この教育の成功をかなり妨げることにになり、長い間にわたつて、この教育は、二つの方向の間をさまよいながら動揺しつづけたのである。

第三共和国政府時代になつて、ようやくフランスは政治面での近代化を達成するのであるが、中等学校教育課程においても、近代教科である現代外国語科目と理科の専修課程が成立してくるのである。一八八一年における近代科目専修中等教育大學入学資格試験の新設は、中等教育において近代教科が、ようやくラテン語など古典教科と同格になったことを端的に示しているのである。

一八九〇年には、中等学校における近代課程は、それ以後は専門的かつ技術的なものであることをやめて、古典的教育となるように決定された。一九〇一年の中等教育改革は、これを決定的に、同時に多であり一つである古典課程中等教育の、複雑な制度の中に統一したのである。

二十世紀後半期に入ると、一九四五年以後はこれまで中等教育系統の教養と考えられてきた技術系教科が、中等教育系統の主要教科に昇格し、中等教育大学入学資格試験において、独立した専攻科として登場してくる。これは、第一次世界大戦後の統一学校運動などの影響もあって、これまでの初等教育系統と中等教育系統という複線型学校教育体系の壁の一角が、ついにくずれ始めてきたことを示しているのである。

ラテン語と並んで、フランス中等教育の大きな特徴の一つとして、「哲学」が最終学年で教えられる点があげられる。ナポレオン一世によって、国立中等学校が、「帝国を支える優秀者の養成機関」として設立されて以来、哲学教育は、その後の幾多の政変にもかかわらず、つねに中等教育のしめくくりとしての役割を果たしてきたのである。現在の哲学教育の基本的精神は、ほぼ第三共和政（一八七〇—一九四〇年）時代に中等教育界に定着したと考えられている。当代における哲学教育は、神と国王という在来の權威を否定し、良心の自由と理性の崇拜をその根本に置くことにより、民主主義国家としての第三共和国政治体制を知的に担う、自主的判斷力を身につけた、公民の養成をその任務としていたのである。

国立中等学校における哲学級は、第二帝政初期の一八五二年にいったん廃止されるが、ナポレオン三世が權威帝政から自由帝政へと政策転換を余儀なくされると共に、一八六三年に再建され、以後今日まで存続することになる。この一八六三年という時点では、国立中等学校の最終学年は、哲学級一本であったが、一九〇二年には数学級が

哲学級と並行して立てられ、二本立てとなるのである。一九四二年には後に「実験科学科」と改称された「哲学・科学級」が付加されて三本立てとなった。

現在では哲学級、数学級などの名称は表面上は消え、最終学年はA哲学・文学科、B経済学・社会学科、C数学・物理学科、D数学・博物学科、E数学・技術科の五学科にわけられており、このうち従来の哲学級に相当するのはA哲学・文学科である。

このA哲学・文学科に関する限り、ここ一〇年来、哲学の授業時間数は週八ないし九時間で変わりなかったのである。なおその他の学科の場合であっても、哲学の授業は最低でも週三時間は配当されている。

つぎに哲学の教育内容についてみると、国立中等学校^リ哲学級は、一八〇二年に中等学校の最上級学年として復活したが、当初は「論理学と倫理学」(9, 37)の二科目しか配当されていなかった。一八〇九年の規定によれば、「哲学級においては生徒はフランス語またはラテン語で、論理学、形而上学、倫理学の諸概論および諸哲学者の学説の歴史を学ぶ」とされている。

この十九世紀初頭の規定に記されている論理学、形而上学、倫理学の三本の柱に、その後学問として独立した心理学が十九世紀中葉に加わり、以後一九六〇年まで一〇〇年以上、哲学教育の教育課程の根本は変わることなく、この四本の柱で組み立てられることになったのである。

一九六〇年の改定で、この四本の柱は表面的には姿を消し、「認識」と「行動」という二つの大枠の下に教科内容が再編成されることになった。しかし内容的には旧来の論理学、形而上学および心理学のうち、記憶・知覚・想像力・知性など認識能力を取り扱う項目が、「認識」の部に入れられ、そして倫理学および心理学における意志・

習慣・情念など、人間の行動に直接結びつく項目が「行動」の部に入れられており、従来の伝統は十分に継承されているのである。

一九七四年以後、この「認識」、「行動」という枠組は「人間と世界」、「認識と理性」、「実践と目的」、「人類学・形而上学・哲学」という枠組にとって代わられているが、このうち最初の三つがそれぞれ旧来の心理学、論理学、倫理学にだいたい対応しているのである。

つぎに一八〇九年の規定にみられる「諸哲学者の学説の歴史」といういわば哲学史概説にあたる部分は、一九〇二年まで存続するが、それ以後、この部分はむしろ代表的哲学者の主要作品の講読という形式に置きかえられている。これは諸思想の要約のつなぎあわせという抽象的で無味乾燥な形式に墮しがちな哲学史という形式より、若者たちを大哲学者の原典に直接触れさせる方が有効と考えられているからである。

なお、ちなみに一九〇二年から一九七四年までの教育課程に一貫して掲げられてきた哲学者名を記すと、プラトン、アリストテレス、エピクテトス、マルクス・アウレリウス、ルクレティウス、デカルト、パスカル、マルブランシュ、スピノザ、ライプニッツ、ヒューム、カント、コントである。これに一九六〇年以降は聖アウグスチヌス、マキアベリ、モンテーニュ、ヘーゲル、マルクス、エンゲルス、クルノ、ニーチェ、ベルグソン、アランなどの名が加えられ、さらに一九七四年以後は、教科内容の現代化を目指して、キルケゴール、フロイト、フッサール、バシュラル、メルロ・ポンティなどが登場している。

もちろん、これら数多くの哲学者たちの著作を幅広く学ぶことが要求されているわけではなく、前記の名列表から三人を選び、その中の一人についてはその代表作一冊を通読することが最低条件として要請されている。

この哲学教育の真の目的は、将来多様な道を歩む若者たちが人生の途上で種々の問題に直面した際、それらの問題を根源的に捕え直し、理性の立場に立ちながら、自由に自覚的に思索を営みうるように訓練する点にある。

ところでこのような思考法を生徒の身につけさせる最上の方法は、教師がそのような思考法を実践することにある。それ故哲学教師には伝統的に大幅な自由が認められており、前述の教科内容のどこに重点を置き、また、どのような方法で教えるかというようなことは、各教師の自由にまかされている。また、個々の問題について教師が自己の意見を述べるのも自由であり、むしろ教科書に捕われずに自己の信念を積極的に表明することが奨励されている。他方また生徒が積極的に課業に参加するよう求められ、また、生徒が自己の意見を明晰な形で表明する場として、「作文」^{エッセイ}が大きな役割を占めているのである。

もちろんどの教科を通してでも思索の鍛練はできるのであるが、哲学は客観的世界を対象とする他の諸科学とは異なり、人間の精神の営みそのものを反省的に捕えることを大きな目的としているので、やはり「考える」とはいかなることか」を若者たちに自覚させる良い修練の場となるのである。哲学教育が中等教育の最終学年に置かれている理由も、それまでばらばらに個別的な知識として教えられてきた諸教科に特徴的な思考法を、哲学教育を通じて反省的に捕えなおし、人間の精神の営みの特徴を総合的、統一的に生徒に自覚せしめることを重要な目的としているからであらう。

このように哲学を頂点とした大学入学資格試験の試験科目は、揺籃期におけるラテン語古典を中心とした口述試験だけから、だんだんと複雑化し、文学と科学が同格となり、さらに二十世紀における科学技術の進歩と工業化社会の発展による現代社会の要請に応じて、技術系教科を含むようになって、ますます多様化されてきたのである。

さらに大学入学資格免状における各種専攻科の特権の同等化措置によって、フランス社会の民主化も推進してきたのである。

したがって、大学入学資格試験制度は、たんに教育制度であるだけでなく、フランスにおける「真の社会制度」(6, 315)となったのである。大学入学資格試験関係法規は、フランス公法体系の一環を構成している。また大学入学資格試験制度はフランス行政制度の根幹ともなっているのである。つまりフランス官僚制社会の根源は大学入学資格試験なのである。これは、大学入学資格免状が一八一五年以降、フランスにおける上級および中級公務員の任用資格となったからである。ナポレオン一世の教育への関心は、もっぱら政治的理由によるものであった。かれは学校開設の独占権をもつ帝国大学学校教育団体(ユニベルシテ・インペリアル)を創設して、帝国の統治機関の一翼をになわせ、国立中等学校(リセ)には「帝国の行政官、軍隊士官および技師」(6, 38)を供給させようとしたのである。

なお国立中等学校(リセ)はわが国における旧制七年制高等学校に相等し、大学入学資格免状は旧制高等学校卒業免状に相等するのである。したがって、わが国の旧制高等学校卒業生は旧帝国大学へほとんど進学できたように、フランスの大学入学資格免状取得者は、全国いずれの国立大学においても履修登録を行うことができるのである。それゆえ、現行の教育制度では、フランスの大学入学資格免状は日米両国における大学前期の一般教養課程修了程度に相等すると見てよいであろう。ただし実際には、例えばわが国の新制高等学校卒業免状取得者は、外国人用大学入学資格免状取得者に準じて取り扱われることになっているのである。

大学入学資格免状は過去一世紀半以上にわたって、フランスにおける知的優秀者の努力目標であった。それはフランス社会階級において、「社会的貴族階級」(8, 386)への所属を示す指標であった。いずれにせよ、大学入学資

格試験制度はフランス青年の道德水準と知的水準の調整機構である。それはフランス青年の道德水準と知的水準の忠実な証人であり、公正な審判者である。それゆえ、大学入学資格試験制度はフランス文明に重大な役割を演じてきたのである。

大学入学資格試験制度の教育的次元の問題と、社会的次元での問題は相互に密接不離な関係にある。たとえば大学入学資格免状取得にともなう社会的特権は、特定の社会階級によって占有される傾向がみられるのである。大学入学資格試験の壁を高くすることは、富裕な有産市民階級が流行、礼儀作法、職業遂行能力と並んで、自治権を確保し、優越的な地位を保持するための手段であった。

大学入学資格試験は、十九世紀初頭に制定されて以来、このような目的を達成するために、フランス社会における指導者階級に奉仕してきたことは否定できない。

しかし、歴代政府が大学入学資格試験制度の制定以来、それを近代化し、民主化しようと努力してきたことも事実である。中等教育系統の就学人口は日ごとに増大し、大学入学資格試験受験者は、急激に増加の一端をたどっている。中等教育就学者の出身階層の変化は、必然的に中等教育の性格を変化させざるをえない。

これまで中等教育は伝統的に将来の社会生活における公務員、医師、弁護士、教師などの自由職業従事者にふさわしい、スコラ哲学的な、演えき的な推理や同化や弁論中心の教養を中心としていた。

しかし現代の工業化され情報化された大衆社会にあつては、大学入学資格試験は現代世界の諸問題に関する知識と技術、とりわけ人間関係処理能力とか、知識の応用力、行動力、芸術的能力、職業人としての実用的、運用的、技術的な能力や態度によつて、真の教養人であるかどうかを検証しなければならなくなったのである。それゆえ、

大学入学資格試験制度はいまや新しい性格のものに脱皮しようとして、暗中模索しているのである。

大学入学資格免状は、もはや社会の支配階級に所属するかどうかの決定条件ではなくなり、特定の職業に対する就職の必要条件となったのである。大学入学資格免状の価値は、免状交付数の拡大につれて、今後相対的には低下するであろう。しかし、それは大学入学資格免状の相対的な希少価値が減るだけであるから、大学入学資格免状の絶対的な価値の重要性は、いささかも減少することはないのである。

しかし、大学入学資格免状を求める人が多くなればなるほど、ますます現代社会における実利的、実用主義的な風潮が、大学入学資格試験にも波及してくるであろう。今後、大学入学資格免状が、これまでのような利害を越えた一般教養の保証という本質的な性格を維持することは、ますます困難となるであろう。

ところで、大学入学資格試験の本質的な性格は、あくまでも(一)実用的な知識よりも一般教養、また(二)記憶力や手先だけの技巧よりも、精神の資質や応用力、ならびに(三)精神活動によって、つねに自己を向上させて行く進歩的な態度の教養を身につける可能性を評価する点にある。

なるほど、言葉の正しい意味における教養人は、現実には存在しないかもしれない。しかし、たえず自己自身を練磨し、死ぬまで自己陶冶を精進しつづける人間も存在しているのである。それでは、どのようにして僅かな限られた時間内での試験によって、そのような人間の素質を判定し、人間の運命を決定することができるのだろうか。

短時間の試験では、出題された問題だけを偶然に知らなかった場合、既得知識の全体についてすら、その判定は不完全であるし、また頭が器用迅速には働かないが、その能力において優れた人間を見落すおそれもある。いわんや個人の潜在能力は既得知識の検証だけでは測定できないのである。

大学入学資格試験に落第しても、偉大な作家アナトール・フランスのように、生活という苛酷な、たえざる試練の中で伸びた人もある。それとは逆に、大学入学資格試験に優秀な成績で合格した者でも、生活の嵐に遭遇して、あえなくも倒れた人も多いのである。

これらの事例は、人間の能力の評価方法がまだまだ不完全であることを示しているのである。

大学入学資格試験においては、個人は自己自身のみに頼らなければならないから、それによって判定されるものは個人主義的な能力であつて、社会的な能力ではない。社会的な価値や態度を同化し実行する能力は、個人主義的な試験によつては測定できないのである。

新興科学である試験方法学^{ドシモロジ}は、この問題の解明に光を投げかけるであらう。将来の試験官は教育評価に関する科学的教養を身につけた教育専門家でなければならないであらう。もともと良い教師が良い試験官であるとは限らないのである。しかし、一九三四年の法令以後、すべての大学教師は自動的に試験官に任命されることになった。その結果、大学入学資格試験の試験水準および試験委員会の採点基準は、まちまちとなったのである。

これは大学入学資格試験の地方分権の結果である。かくして、中等教育大学入学資格免状は、フランス銀行紙幣のように、大学入学資格免状発行所の信用度のいかにかわらず、全国において合法的に通用するようになったのである。

大学区ごとにまちまちな大学入学資格試験の水準の同等化、また大学入学資格免状の価値の同等化の実現は、大学各学部が試験問題の自由出題権を握っている限り不可能である。しかし、この問題の暫定的な措置として、中等学校教育の実情に精通している中等教育視学官が、中等教育の目的と水準に合致した試験問題を作成して、各学部

長がそれを選定するようにすれば、大学入学資格試験の同等性を確保することができるのである。

試験委員会のまちまちな採点基準を是正するためには、試験業務における卓抜した判断力、学識、機智、氣質を兼備した、一定数の専門職試験官団体を編成する必要がある。このような専門職試験官団体は、団長の大学教授によって指揮され、五カ年間ぐらいの任期で、大学入学資格試験業務に毎年専従して担当するのである。

中等教育大学入学資格免状は、(一)高等教育履修適任証書であり、また、(二)国立専門^{グラント・ユニバーシティ}大学学校教育履修適任証書である。しかし大学入学資格免状の性格はそれだけにとどまるものではない。

それではいったい、大学入学資格免状の本来の性格は何であるのか。大学各学部と国立専門大学校における専門教育が効果的であるためには、一般教養の基礎が確固として築かれていなければならないのである。そうでなければ、未来の技師は大学各学部や国立専門大学校における専門的な技術教養だけでよいのであるということになる。未来の技師が技術的教養だけをもっていればよいということになれば、大学入学資格試験はいいということになるであろうか。その場合には、おそらく、(一)大学入学資格免状の特権は無用となり、(二)大学入学資格免状の価値は形式だけのものとなり、(三)大学入学資格免状の同等性は見せかけだけのものとなり、(四)免状の取得のために費やされた時間は、無益に空費されたことになってしまうであろう。

さらに大学入学資格試験の目的と性格について、試験官が一致した^{コンセンサス}合意をもつことは、最も肝要な問題である。それゆえ試験官の合意を維持し、強化する方法を運用する必要がある。芸術作品が各部分の調和のとれた全体であるように、大学入学資格試験における試験官の分業も、調和のとれた公正さの全体的行為となる必要がある。大学入学資格試験と中等教育の運命は、この根本問題に対する解決がどうかにかかっているのである。

最近の大学入学資格試験の運営において重要性を増してきた進路指導問題、具体的には中等学校内部における進級試験制度は、中等教育の教育的、社会的役割に関する中等学校教師の十分な同意が前提条件となっている。中等学校における進級試験制度の目的は、大学入学資格試験をもっと検証力のある試験にすると同時に、効果的な中等教育を保証することにある。

中世バリ大学の各「国民団」^{ナショナル}は、学生が優秀な成績を実証した後でしか、学寮^{ヨージョウ}における討論裁定試験^{デアルミナチキ}（バカロレー）の司会を許可しなかったのである。それと同じように、中等学校進級試験制度の役割は、真の大学入学資格試験の受験適任者だけに、大学入学資格試験を受験させることにあるといつてよい。このような進級試験制度の運営によつて、大学入学資格試験は中等教育の規制と統制機能、また社会淘汰機能という本来の任務を、効果的に遂行していくことができるのである。

校内進級試験制度は中等教育の支柱である。しかし中等学校生徒は、学校という温室から現実の社会へ出る時に、大学入学資格試験という校外試験において、自己の蓄積した知識を報告し、知的能力をためてみることも重要なのである。したがつて進級試験の成績および学期末定期試験の成績など、中等学校当局が作成した内申書の審査だけで、大学入学資格免状を自動的に交付するという提案には賛成し難いのである。

もちろん、そのようにすれば、試験の混雑も避けることができるし、中等学校優等生の不運な落第もなくなるであらう。しかし、そのような特権を多数の普通の才能の生徒にまで与えることは、試験そのものの存在理由をまったく失なわせてしまうのである。不運を避けるために、優等生に対して試験の難関を免除することは、人生の闘争に必要な自己支配^{アイディズ・コントロール}という男性的能力の芽をつみ取ってしまうことになるのである。

試験とは意志の鍛練である。その意味では、あらゆる試験は美であり善である。試験に対して臆病であったり、試験の苦痛から逃避しようとするのは、いかなる口実であれ、人間陶冶にとって望ましくないものである。

校内進級試験の重視は、それを大学入学資格試験に代えるためではなくて、大学入学資格試験に対して、もっと多くの保証と大きな意義を与えるためなのである。

大学入学資格試験の価値は、受験者の適性ならびに将来の進路指導における予告機能にある。したがって大学入学資格試験の目的は、(一)受験者の高等教育への進学が適当であるか、(二)どのような条件で高等教育を効果的に履修できるか、(三)高等教育への進学が、まったく無駄な骨折りではないかについて、科学的に正確な資料にもとづいて助言することにある。

かくして、大学入学資格試験における試験問題の選定および試問と採点の技術問題が重要問題となってくる。この問題を解決するために、大学当局者は筆記試験問題の出題、試験委員の選定、口述試験の方針などについて、中等教育視学官と緊密に協力しなければならない。

大学入学資格試験の受験準備屋の受験戦術、また受験専門講座などによる受験準備教育は、真の教養ならびにそれを検証する大学入学資格試験に対して、甚大なる損害を与えながらも、不死身のごとく頑強に生き永らえてきた。大学入学資格試験の受験虎の巻参考書は、真の中等教育の持主ではなくて、一夜漬の知識を詰めこんだだけの似而非大学入学資格免状取得者を相変らず供給しつづけているのである。人間が安易に流され、優柔不断に支配される限り、大学入学資格試験を受験準備屋の受験戦術から保護し、真実の教養を似而非教養から保護することは、いかなる法規の威力をもつても不可能であろう。

これは、試験において判定されるものは、人間の多くの能力のうち量化可能なもの、少なくとも量化容易なもの、すなわち既得知識が中心となっているからである。そこでは、依然として記憶と練習が最大の武器となる。したがって主として既得知識を検証するための試験では、主知主義的な詰めこみ偏重の受験準備教育が幅を利かすことになるのである。

それゆえ、中等教育に重大な支配力をもっている大学入学資格試験の任務は、社会や個人の要請や福祉に対して弾力的に応じうるように、フランス各界の世論にしたがって調整されなければならない。なぜなら、フランスでは「試験制度の重大な改革なくして、重大な教育改革はありえない」(S. 198) からである。その時にこそ初めて、大学入学資格試験の真の意義が達成されることになるのである。

このような大学入学資格試験は、社会の中に知識教養人貴族階級を形成することになるであろう。しかし、この知識教養人貴族階級は、知性と勤労のほかにはなんらの社会的特権ももたないのである。そのうえ、知識教養人階級は、何人であっても、教養の持主でさえあれば迎え入れられるのである。

したがって、このような知識教養人貴族階級は、これまでのあらゆる世襲の特権貴族階級とはまったく別個の階級であるといつてよい。なぜなら知識教養人貴族階級の唯一つの条件と保証は、各自の道徳的価値と明晰な知性だけにあるからである。

つまり社会の構成員のすべてが、そのような教養を身につけるようになった時には、その社会全体が知識教養人貴族階級によって占められるようになるのである。そのような時代においては、大学入学資格試験制度は初等教育系统と中等教育系统という複線型学校体系が産み出した教育闘争を維持するのではなくて、大学入学資格試験制度

の本来の崇高な教育的、社会的な使命を遂行するところにあるのである。

(一九七五・一二・一稿)

参考文献

- (1) Chevallier, P., L'enseignement français de la révolution à nos jours, 1968.
- (2) Durkheim, E., Education et sociologie, 1968.
- (3) Durkheim, E., L'évolution pédagogique en France II, 1938.
- (4) Hubert, R., Histoire de la Pédagogie, 1949.
- (5) Lewandowski, O., La signification du baccalauréat selon les classes sociales, dans "Cahiers pédagogiques N°92", 1970.
- (6) Piobetta, J. B., Le baccalauréat, 1937
- (7) Piobetta, J. B., Education nationale et instruction publique, 1944.
- (8) Ponceil, F., Histoire de l'enseignement en France, 1966.
- (9) Weill, G., Histoire de l'enseignement secondaire en France, 1921.
- (10) Fraser, W. R., Education and Society in Modern France, 1963.
- (11) Kandel, I. L., Comparative Education, 1933.
- (12) Kandel, I. L., The New Era in Education—A Comparative Study—, 1955.
- (13) Kazamias, A. M. & Massialas, B. G., Tradition and Change in Education—A Comparative Study—, 1965.
- (14) Kings, E. J., Other Schools and Ours, 1967.
- (15) Meyer, A., The Development of Education in the Twentieth Century, 1949.
- (16) Moehlman, A., Comparative Education, 1952.
- (17) Moehlman, A., Comparative Educational Systems, 1968.
- (18) Park, J., The Culture of France in Our Time, 1954.

- (19) Reisner, E., Nationalism and Education since 1789, 1925.
- (20) Rothera, H., The New Baccalauréat in its Context, in "Comparative Education vol. 4", 1968.
- (21) Sandiford, P., Comparative Education, 1918.
- (22) Ulich, R., The Education of Nations, 1962.
- (23) クルティウス、フランス文化論、創元社、昭和二八年
- (24) アンドレ・モーロー、フランスとフランス人(岩波新書)、岩波書店、昭和三二年
- (25) ピオベッタ
中山・諸田訳、フランスの大学(文庫クセジュ)、白水社、昭和三八年
- (26) デュルケーム、フランス教育思想史下、普遍社、昭和四二年
- (27) 小関藤一郎訳
アントワニス・レオン、フランス教育史(文庫クセジュ)、白水社、昭和四四年
- (28) 池端次郎訳
キン
池田進・沖原豊監訳、世界の学校教育 その比較研究、葵書房、昭和四六年
- (29) 村松 剛、甦るフランス その文化(「世界文化シリーズ1 フランス」所収)、世界文化社、昭和三九年
- (30) 皇 至道、大学の歴史と改革(「講談社現代新書」、講談社、昭和四五年
- (31) 白井成雄、リセにおける哲学教育(「ふらんす」第五〇巻第七号七月号所収)、白水社、昭和五〇年

【備考】文中の()内の数字は文献番号、文献の引用頁数を示す。

